
シンポジウム報告

かささぎプロジェクトによる震災避難家族の支援

平田修三^a、根ヶ山光一^b、石島このみ^a、持田隆平^a、白神晃子^c

Support for families forced to live separately due to the Fukushima nuclear disaster: an interim report of KASASAGI project

Shuzo Hirata, Koichi Negayama, Konomi Ishijima, Ryuhei Mochida and Akiko Shiraga

Abstract

There are many families affected by the Fukushima Dai-ichi Nuclear Power Plant Accident following the Great East Earthquake and forced to live separately (mother and children taking refuge in Tokyo or surrounding prefectures with fathers staying behind). KASASAGI PROJECT was launched for the purpose of providing support for them, acting as a bridge between split households through parent interviews, lending of Skype devices and video recording of children. The support has been provided to 2 families. Furthermore, a questionnaire was distributed to about 1,000 families evacuated to Saitama prefecture from Tohoku Region to understand their general situations, and 248 families completed it. The lives of these families are thought to shift in stages: 1) securing survival, 2) adjusting the basis of life, and 3) having a perspective of future life. Now they seem to be in the transition from stage 2 to 3 and showing signs of prolonged stress of isolation from community networks, normalization of living separately and apart, etc. Therefore, it is necessary to constantly get information on their needs and to provide long-term, continuous support in a flexible manner.

Key Words : Great east Japan earthquake, Fukushima nuclear accident, evacuated family, isolation from community networks, KASASAGI project,

問 題

2011年3月11日に発生した東日本大震災は超広域・複合災害を特徴とする前代未聞の震災であり、震災から1年以上が経過した今なお多くの人々に多大な影響を与え続けている。筆者らが所属する早稲田大学人間科学学術院発達行動学研究室では、福島

県から関東に避難した家族がおり、そうした家族は避難してもなお様々な困難に直面していること、そして、同様のケースが多数発生しているとの情報を得た。そこで自分たちの専門性を活かした支援を行う目的で、2011年6月に「かささぎプロジェクト」¹⁾を立ち上げた。

^a 早稲田大学大学院人間科学研究科 (Graduate School of Human Sciences, Waseda University)

^b 早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

^c 早稲田大学人間総合研究センター (Advanced Research Center for Human Sciences, Waseda University)

震災による自主避難者は、とくに震災発生から間もない時期においては集団全体の把握が遅れ、行政対応・支援が行き届かない傾向が強かった。また、こうした家族は、避難先に父親の安定的な就労環境がないため、母子だけで避難し、父親が居住地に残り仕事を続けるケースが多い(福地, 2012)。これは家族システムの視点からみると「子どもの父親剥奪」「父親における子剥奪」「夫婦双方における配偶者剥奪」といえる状況である。さらに母子は「旧地域ネットワークからの離脱と新地域への移入」という生活環境の変化にも直面する。家族はこれらに対し過酷な多重対応を迫られ、しかもそれが極めて長期にわたる。そのため、こうした状況を丁寧に把握すると同時に、多面的な支援を行うことが必要であると考えられた。

なお、本プロジェクトの活動内容については、すでに一部報告している(根ヶ山・平田・石島, 2012)。本稿ではその内容を含みつつ、2012年3月時点までの展開を踏まえて報告を行う。

目的

東日本大震災で関東に避難した家族の置かれた状況・ニーズを把握しつつ、それに応じた支援を実施する。

方法

くかさぎプロジェクトで実施した支援・調査

I. 自主避難家族2事例に実施した支援・調査

2011年6月に、福島県から関東へと母子が避難し父親が現地に残留する家族5世帯を対象に、震災体験の聴き取り調査を行った。同時に、筆者らで実現可能な支援を提案し相談の機会を持った。その後、支援の提供を希望した2家庭(F家・T家)を中心に、2012年3月現在に至るまで、各家庭の状況の変化やニーズに応じつつ、①母親への継続的面接による家族の震災体験の傾聴・ニーズの把握、②Skype等映像による父-母子間接触機会の提供、③ビデオカメラ・GPS・Actigraph(活動量測定器)による新環境下での子どもの適応過程の追跡記録、④対象家族が立ち上げた「避難母子の会」の活動支援、⑤福島に残留する父親への面接と母子への報告、といった支援・調査活動を行ってきた。

F家とT家は震災前から家族ぐるみで交流があり、

5月ごろに母子が関東圏内の賃貸住宅に自主避難した点が共通している。支援・調査開始当時、F家・T家の子どもはそれぞれ、男児Fa(7歳)・女児Fb(3歳)、男児Ta(9歳)であった。なお、残りの3家庭についても活動開始から4ヶ月間はメール・電話・訪問等で時折近況を伺い、連絡を中断する際には今後必要に応じていつでも相談に乗ることを伝えた。

II. 東北から関東に避難した家族の実態調査

震災後に関東に避難した家族全体の状況を探り、Iの対象家族の特徴をそのなかに位置づけて理解するため、埼玉県に避難した家族945世帯を対象に質問紙調査を実施した(2012年1月)。質問項目は、Iの結果を踏まえ、避難状況や意識、その変化等を中心とした。質問紙の郵送は避難所轄部署を通じて行った。

以上の取り組みは、刻々と変化する避難者をめぐる状況を可能な限り包括的に捉え、かつ柔軟に対応するために試行・調整されてきたものである。本支援・調査のプロセスは研究者と実践者間の相互影響過程を踏まえたアクション・リサーチ(保坂, 2003)として位置づけることができよう。

<倫理的配慮>

Iについては、対象家族から発せられたニーズに沿った支援を行い、得られた結果については随時フィードバックを行った。また、口頭・論文発表に際しては事前に対象家族と相談を行い、公表に伴うプライバシーの保証には十分配慮した。

IIについては、早稲田大学倫理委員会のチェックを経たうえで実施した。

結果と考察

①福島県から母子が関東に自主避難した家族2事例

支援を行ってきたF家、T家の語り・エピソードのなかから、(i) 家族内外において、避難時・避難後に発生した人間関係上の危機・軋轢、(ii) 子どもの新環境への適応、についてうかがえたものを抽出し、それぞれ時系列に沿って提示しつつ、考察を加えていく。また、(iii) かさぎプロジェクト支援への評価・反応、についても検討する。

(i) 家族内外において、避難時・避難後に直面した人間関係上の危機・軋轢

【選択を迫られる場面での夫婦・親子・親族間に生じる意識のズレ】

3月11日の震災や原発事故以降、さまざまな情報が飛び交い、状況が時々刻々と変化するなかで、家族はその都度なんらかの決断を迫られることになった。その際、夫婦・親子・親族間において判断に齟齬が生じ、場合によっては対立に至るケースもあったようである。以下は、震災直後から避難時にかけて家族・親族間で生じた意識のズレについての語りである。

<F家母親の語り>

あんな水素爆発なんてあっても仕事に行くといっている夫を、えー、この人と家族でいいんだろうかっていう(笑)…思いもちょっとはしたというか。家族と逃げるほうが先じゃんって私は思ったりして。そこで一瞬、こう、「どうすんの？」って責めてしまった部分があった。

<T家母親の語り>

(自主避難したことを)主人の両親には言っていない。(略)もともとあまり、そんなに(住居の距離は)離れてはいないんですけど、連絡を取ってなくて。(略)いろいろ難しくって。世代の差でやっぱりね。避難するとかね、そういうのとか理解してくれない人とか多いから。やっぱり、国とか県がちゃんと指示とか出してくれるんなら理解してもらえんだけど。そういう人ってやっぱり多いと思います。姑の理解が得られないから出られないとか。

F家母親の語りでは原発事故の後で、一家で避難すべきと考えた母親と仕事を優先する父親との間で判断のズレがあったことが語られている。F家ではその後、夫婦が話し合ったうえで、父親が母子を関東に避難させ父親のみ単身で福島に戻るという決断を下した。その際に母親は、他の家庭では父親が反対し避難できないケースもあることを知り、改めて夫に対する感謝の気持ちが芽生え、むしろ夫婦の結束が強まった。

T家母親の語りでは、関東に自主避難することを理解してもらえないのではないかという懸念から、当初は親族に避難することを伝えるのを躊躇したことが語られている。その後T家が自主避難したこと

を親族が知った際に大きな問題は生じなかったようであるが、いずれにせよ、避難当初に親族に対して意識のズレが生じることを懸念する気持ちが生じたことは注意深く受け止める必要がある。こうした状況は、避難者が避難すること自体を後ろめたく感じたり、親族同士で互いに助け合うことを困難にしたりすることにつながりうるからである。

F家・T家の場合は幸いにも家族・親族の間で大きな問題に発展することはなく、むしろ結束が強まった部分もあったが、家庭によっては意識のズレが顕在化した後、それが埋まらずに軋轢が残るケースもあると推察された。

【別離による寂しさ】

F家とT家では、福島に残った父親と関東の母子の間で頻繁に電話連絡をとりあったり、月1～2回のペースで父親が母子のもとを訪問したりする生活を送っていたが、それでも家族全員が別離による寂しさを感じていた。

<F家母親の語り>

とくに息子は泣くのをこらえてそうなきがしょっちゅうある。別れるとき(母子を訪問した父親が福島に戻るとき)にしても…、最初のころは泣いてました。いつも。

ここでの寂しさは、父親との別離に加えて、それまで住んでいた土地や人間関係から引き離され、その後の見通しも立たないという状況が拍車をかけているのではないかと推測された。また父親も、家族と離れて独りで生活を長期にわたり続けることによる孤独感を訴えていた。

【新旧の人間関係に対する複雑な心理】

T家・F家は避難地域ではない場所からの自主避難であり、また避難先の生活がいつまで続くか見通しが立たないことから、福島に残る友人・知人や避難先近隣との人間関係に対して複雑な感情を抱いていた。

<F家母親の語り>

なんとなく向こうの友達に申し訳ない気持ちもあって、連絡しづらいしってのもあって。こっちに逃げてきた友達としか話さないのもあって。か

とって、もともと地元（東京）にいる友達がいるんですけど、何人か会っても、私が一番心配な放射能のこととか、自分のこととかだけ話すわけにはいかないですし。(略)なんか、今の私にはちょっと違うなあっていうのがあって、ちょっと苦痛。(略) すごく皆様このへんの方は気さくに接して下さって。それはそれで本当にありがたく…。(略)でも落ち着いてくると、だんだん会う機会が少なくなってきて。(略)私も半年しかいないかもしれないしなあっていう気持ちもどっかにあって。(略)仲良くしていただいているんですけど、本音を話せるのはあの体験を一緒にした友達って感じはしますね。

<T家母親の語り>

私の方がまだ入っていけてないのかな(笑)。ママ友っていうの？ いつもこうなんていうの…、朝、登校班って言って、下に行かなきゃいけないのみんな。お母さんたちも出てくるわけ(子どもを学校に送り出す際に、マンション前広場に母親たちが集合する)。もうね、朝からみんなお化粧をして出てくるんだけど、そんなのできないと思って(笑)。私は最初2～3日だけは頑張ったんですけど、もう無理と思って(笑)。

F家母親の語りでは、下線で示したように「向こうの友達(=福島に残る友達)」「こっちに逃げてきた友達(=福島から関東に避難してきた友達)」「もともと地元にいる友達(=関東在住の友達)」「皆様このへんの方(=避難先近隣)」といった4つの人間関係に対して抱いた気持ちが語られている。福島から関東に避難してきた友達との絆が深まる一方で、福島に残る友達に対しては「申し訳ない」という気持ちが沸き起こり、さらに避難先での人間関係を開拓し深めることを躊躇する様子うかがえた。やや深刻な見方をすれば、避難先で心理的に孤立しかねない状況がみてとれるが、同じく福島から避難してきた友達が互いに抛りどころとなっていることがうかがえた。

T家母親の語りでは、避難先コミュニティの習慣に対して抱いた当惑が語られている。笑いを交えて話して下さったことからもうかがえるようにそれほど深刻な様子は見受けられなかったが、避難先コミュニティにおいては、避難者が単なる新

参者ということ以上に注目され、周りから支援を受けうる立場であるため、そこでの互いの習慣における違いは相応のストレスを生む可能性もあると考えられた。

【今後の見通しが立たず「宙ぶらりん」】

母親への継続的なインタビューを通して「その時々

(ii) 子どもの新環境への適応

【子どものストレス表出】

F家では、福島から離れ当面の生活が落ち着いた5～6月頃に、母親が子どもの行動上の問題に気づく場面があった。

<F家子どもについての母親の語り>

・息子(Fa)も一ヶ月前(5月頃)は身体的に、なんていうか、こういうふうにする(口をもごもご動かす仕草)のがでてきて。(略)あれって精神的な部分からくる…。私もチックの一種だろうなって私も思って。(略)あとエレベーターとかも、もし地震で止まっちゃったらやだからって、絶対に一人じゃ乗らない。
 ・娘(Fb)が最近、一週間くらい前は喉が痛いって言って。(略)小児科に連れていったら案の定「お母さん、これなんでもないですよ」って言われて。それが治まったかと思ったら、今は毎日「おなか

ここで語られたことから、避難先での生活が落ち着いた頃に子どもに起こっていたこととして以下が指摘できる。まず、チック様症状など、ストレスや緊張に起因するとみられる身体症状が発生していたこと、そして、避難後も震災の恐怖が継続していたことである。また、Fbの行動が母親への頻繁な訴えかけというかたちをとったことは、

とくに幼い子どもからすれば震災から避難までに親の判断で状況がめまぐるしく変化し親が子どもを十分にみる余裕のない期間が続いたため、状況がひとまず落ち着いてから親の注意を向けさせる行為、あるいはある種の不満を表出する行為だったと考察できるかもしれない。

【避難先コミュニティへの適応に関するたくましさ と消極性】

子どもの避難先コミュニティへの適応については、母親・父親の語りと子どもの観察結果から総合的に検討した。結論からいうと「避難先にたくましくとけ込もうとする姿」と「避難先にとけ込むことに対して消極的な姿」の両方がみられた。ただし、どちらの場合においても避難児童特有の背景が影響しているようであった。以下、語り・エピソードを交えてさらに詳しく検討していく。

まず、避難による転校当初に起こったこととして、Taは学校の友達から地震や原発に関することからかわれる経験をしていた。いじめに発展したりするようなことはなかったそうであるが、母親が「子どもも気にしてみたい」「子どものことなんでね、(私)普段は気になんないけど、そのときは気にしちゃって」と語ったように、こうした出来事が原発避難者特有の不安や心配を増幅させたことは確かである。

その後、「避難先にたくましくとけ込もうとする姿」として、例えばTaの事例では、以下のようなエピソードがあった。2011年7月末、本プロジェクトメンバーの大学院生2名が、T家を訪問して母親とTaと話をした後、同意をとったうえで、Taが外遊びをする様子を観察した。Taはマンションの外に遊びに出るなり、同じマンションに住む子どもたち4人グループ(Taと同学年と下の男児)と一緒に遊び始め、大学院生2名に対してそれまでの友好的態度から一転して攻撃的言動を向けた。子どもたちは続いて水風船遊びを始め、Taもそれに加わった。途中、子どもグループの数名が大学院生に気づき、不審がるそぶりを見せた。そのうち、リーダー格の少年BがTaに突然ふぎけて水をかけた。水かけの対象は大学院生へと転じ、それにTaが積極的に加勢した。その後、大学院生2名がTaとともに家に戻ると、Taはそれまでとはうって変わって穏や

かになり、大学院生に対してばつの悪そうな表情を浮かべた。

Taの避難先マンションでは、Bをリーダーとした同学年あるいは近い学年の子ども同士のグループが既に形成されていた。また、BはTaの転校当初にTaをからかった張本人であった。そのため、観察時点でのTaの集団内での立場はやや不安定であったと推察される。こうした背景を考慮すると、Taは大学院生らを突如“攻撃対象”と見立ててメンバーを扇動することで、グループへの参入を図ったのではないかと考えられた。

続いて、「避難先にとけ込むことに対して消極的な姿」が垣間見えたF家の子どもたちの事例を紹介する。筆者らはF家を訪問する際には、母親に休息を提供するという意味合いも込めて、Fa、Fbと外遊びを行った(2011年6月から12月にかけて計4回)。そこでは他の子どもたちとの交流はほとんど見られなかった。近くで遊んでいる子どもを時折気にするそぶりは見せるものの、自ら声をかける場面はみられず、きょうだい各々がボールを高く上に投げて自らキャッチする、自転車を乗り回すなど、一人遊びが中心であった。一方観察者らとの交流は活発で、身体を動かすことを楽しんでいるようであった。

学校や習い事での他児との交流については十分に把握できなかったため、考察は慎重に行うべきであるが、GPS・Actigfaphによる行動圏・活動量測定において動きが少ない傾向がみられたことも考慮すると、総合的にみてFa、Fbは避難先での子ども集団へはそれほど積極的に関わろうとしていないように見受けられた。これについては母親が「1学期は子どもがたぶん自分の何かでいっぱいいっぱい…」「(当初は)私も半年たったら福島に帰ると普段から言っていて、近所のお母さんとあまり仲良くしてはいけない感覚があったりしたので、息子にもなんとなくそういうのが…(伝わったのではないかと)と推察するように、子ども自身に心理的な余裕のなさがあつたり、親の複雑な心境を暗に汲んでいた可能性がある。

以上のように、F家、T家の子どもたちの事例では、避難先コミュニティへの適応に際して、自らの立場を理解したうえで、周囲の人間関係や状況をモニターしながら適応しようとする、あるいは適応を

ためらう様子が垣間見えた。他児との交流が広がらないことなど懸念される部分も残るが、これは家族全体の今後の見通しの立たなさや深く結びついているようであった。

(iii) かささぎプロジェクト支援への評価・反応

【Skype提供に対する反応】

2011年7月から、福島に残る父親と避難してきた母子をつなぐ支援の一つとして、PC・インターネット環境を貸与し、Skypeを用いた父-母子間のやりとりなど自由に行ってもらった。

Skype使用时、映像を介して髪型や表情について談笑する様子や食事場面を共有したり、画像装飾機能を用いてゲーム的に映像を楽しむ場面が見られた。「顔が見えることで安心できる」「表情や髪型を話題にしたり手を振ったりしてコミュニケーションができる」「子どもが楽しみにしている」(母親)、「子どもの顔をみられるのは嬉しい」(父親)といった感想が聞かれた。このようにSkype提供は少なくとも短期的には奏功したと考えられたが、やがてその使用頻度は減っていった。ただし、その後Skypeでの通信が完全に途絶えてしまったわけではなく、また、貸与したPCは次に述べる「避難母子の会」の運営を促進する一助にもなった。

【避難母子の会の設立と支援】

2011年7月に、F家・T家の母親らが中心となって「避難母子の会」を立ち上げた。その後現在に至るまで月に一度の交流会をはじめ、原発関連の集会に積極的に参加するなど精力的に活動を続けている。メンバーは関東圏に母子で避難した方々が中心であり、毎回15名前後の母子が参加している。かささぎプロジェクトでは、当初は交流会の場所を提供したり、母親たちが活動している際に子どもの遊び相手をする支援を行ったが、母子会の運営態勢が整い、さらに弁護士や学生ボランティアなどの支援者が参入するようになってからは、時折近況をうかがって相談に乗るといったスタンスに次第に移行していった。

母親たちによる以上のような動きがでてきたことについてさらに詳しく考察するために、「避難母子の会」の設立・活動動機に関わる語りを取り上げて検討する。

<F家母親の語り>

(6月の初回面接時、「たとえばこんなお手伝いとかあったらいいのに、とか思ってることありますか?」という問いかけに対して)今は逆に、お手伝いをしてほしいというより…。私も福島に5年住んで、なんか見えてきてしまった立場で、どこか後ろめたいと思っているので、福島の土壌改善とか、福島の方たちが安全に暮らせるネットワークっていうか、(略)私が作りたい、作れるわけじゃないけど、そういうので活動したいっていうか。(略)自分も支援できる立場に早くなりたいっていうか。

このやりとりはF家の避難が一段落した直後のものであり、初回面接時において、ある意味で筆者らが最も胸を衝かれた語りである。ここでは、自主避難者が自らを「支援を受ける側」の立場に置くことを躊躇する気持ち、地元に対して「後ろめたい」と思いながらも地元の復興を願って自ら何か行動を起こそうとする気持ちが切実に語られている。ここで語られたような気持ちや先述した「新旧の人間関係に対する複雑な心理」が「避難母子の会」の立ち上げに大きく影響したと考えられた。さらに、母子会のメンバーが原発関連の集会に頻繁に参加していることからもうかがえるように、「自主避難者が置かれた状況を自ら社会に向けて発信していく」という動機も強いと思われた。

このようにして立ち上げられた避難母子の会の活動の展開を見聞しながら、筆者らは母親たちの思いや力強さを改めて感じ取り、本プロジェクト全体のスタンスを調整していくこととなった。具体的には「支援者-被支援者」という関係にとらわれることなく、積極的な生活者・発信者としての自主避難家族の姿を記録しつつ、何か問題が発生したときにはすぐに駆けつけるスタンスに移行していった。

母子の会の活動が軌道に乗り始めた頃、F家母親から「話を聞いてもらえて、自分のしたいことの整理がついた。かささぎプロジェクトが協力してくれることになったから、母子会を立ち上げてみようという気持ちになった」と感謝の言葉をいただいた。これは本プロジェクトで行った支援に対する一つの評価でもあり、この支援に意義があったことの証であると思われた。

②東北から関東に避難した家族の概況

IIの質問紙調査では、2012年3月の時点で248世帯から回答が得られた（回収率26%）。現在分析中の項目もあるため、今回報告できるもののうち、①で考察した2家族が直面した状況を、関東に避難した家族全体のなかに位置づけて理解する際に特に重要であると思われた結果に絞って検討する。その観点から抽出されたのは、「震災前居住地」「震災前と10ヵ月後における同居する家族構成員の変動」「現在感じている困難」「今後の見通し」の4つである。

まず、今回の回答者の90%が福島県内からの避難者であり、そのうち、少なくとも24%が避難時点において警戒区域以外からの避難者だった。次に「震災前と10ヵ月後における同居する家族構成員の変動」において最も特徴的であったのは世帯主とその配偶者の同居解消率である。両者が同居していた190世帯のうち、震災後に同居解消した世帯は81世帯（43%）に上る。さらに子育て世代の父親・母親・未成年の子どもの同居率に注目すると、避難してきた母親はいかなる状況においても子どもと同居し、他方父親は母子と同居するか単身で生活する傾向が強いことが明らかになった。続いて「現在感じている困難」についての自由記述をカテゴリ化して回答者自身と家族構成員別の回答数を集計したところ、「配偶者の心身の不調」（35名）、「子どもの避難先での生活」（33名）、「回答者（世帯）の金銭面の問題」（33名）など多岐にわたる困難が発生していることが明らかになった。「今後の見通し」については「わからない」が42%を占め、「東北の実家に帰る」など何らかの見通しが立っていることを示す回答を大きく引き離して最多であった。

これらを総合すると、震災後、福島県に父親を残し、母子が関東に避難するケースは広範に認められる避難形態であり、震災後10ヶ月が経過した時点でも多岐にわたる複合的な困難を抱えていることがうかがえる。また、今後の見通しが立たないケースも多い。①で検討した2つの自主避難家族は、以上のように母親が幼い子どもを伴って関東に避難した相当数に上る家族のなかの事例として位置づけられ、そこで描き出されたことは、こうした家族が直面した経験の一端を詳細に示すものであるといえよう。

なお、質問紙調査の詳細については改めて別の機

会で報告し、調査の継続を承諾した世帯についてはこれから接触を開始し、調査と支援を同時に行う予定である。

総合考察

震災後の母子の実家等への避難と父親の残留という選択は、母子が近接し父親が分離するという日本的家族の特性が反映されたものといえるかもしれない。本プロジェクトを通して、こうした困難な状況にも拘らずそれにめげないで生きようとする母子の姿が垣間見え、また本プロジェクトがそのようなたくましさの発生の一助にもなったという感触は得られたものの、母親は新旧地域のどちらにも安定的に根が下ろせず、子どもも新たな地域でのネットワーク作りに苦労が伴う状況も見られた。

避難家族の生活は、時系列に沿っていえば、1.「生存」を確保する（とりあえず危機を避けるため、雨露をしのげる場所に移る）、2.「生活」基盤を整える（ひとまず切迫した危機を乗り越え、自律的な環境を確保するとともに、避難者のネットワークを作る）、3.「人生」を展望する（安定的職業と定住地を確定し、将来を見通した生活形態に入る）に分類できよう。現在は2から3への移行期として、生活形態の再組織化の兆しがみえるとともに、さらに新たな課題も出てきている段階と考えられる。貸与された住宅はいずれ引き払わねばならず、さりとて放射能について安全性の見通しが立たなければ福島に回帰することも考えにくく、生活の見通しを立てづら。現在と将来にわたる安定的な生活設計（人生）が他律的に阻害されるという意味で、生存権の侵害ともいえる事態である。さらに分離の恒常化による父親のストレスと家族の求心性の低減も懸念される。母子の孤立状況は、子どもの成長に伴う自立にも影を落としかねない。

本プロジェクトで支援を行ってきた2家族についての記述は、福島からの避難者が直面した経験を詳細に描き出したものといえるが、そこで得られた知見の一般性については、2家族が比較的裕福な家庭と思われたことを考慮する必要があるだろう。たとえばConger & Donnellan (2007) が主張するように、低収入や借金の多さ、ネガティブな金銭上の出来事は経済的窮迫感を生み、それが親の情動的・行動的問題を引き起こし、さらには養育・子育てに

影響を与えうる。家族によっては二重生活や失業といった経済的に家族を圧迫する出来事が、本稿で示されたこと以上に家族に深刻な問題を生じさせている可能性がある。

本プロジェクトの今後の展開として考えているのは、引き続き2家族のニーズを把握しつつ柔軟な支援を継続すること、質問紙調査の分析等を通して避難者をめぐる状況をより包括的に捉えることである。さらに、今後社会一般の関心の風化が予想されるなかで、無関心層への働きかけも視野に入れたいと考えている。

注

- 1). かささぎは七夕伝説において牽牛と織女を橋渡しした鳥である。本プロジェクトの指針に込めた、震災により離散した家族を結びつきたいという思いを託している。

文 献

Conger, R., and Donnellan, B. (2007). An Interactionist perspective on the Socioeconomic Context of Human Development. *Annual Review of*

Psychology, 58, 175-199.

福地成. (2012). 震災が養育環境に与えたもの, 子どもの虐待とネグレクト, 14 (1), 14-19.

保坂裕子. (2003). アクション・リサーチ, 無藤隆・やまだようこ・南博文・サトウタツヤ[編], 質的心理学—創造的に活用するコツ, 新曜社:東京, 175-181.

根ヶ山光一・平田修三・石島このみ. (2012). 原発事故による避難家族への支援, 臨床発達心理実践研究, 7, 42-46.

謝 辞

本調査・支援に深い理解を示して協力してくださった、F家とT家をはじめとする避難母子の会の皆様、そして、質問紙調査に回答してくださった皆様に心より感謝いたします。

また、本プロジェクトは学部生を含む大勢の根ヶ山研究室の現・旧メンバーの協力のもとで行われています。とくに、野田麻衣子氏、白石優子氏、米澤香那子氏には、避難家族への接触、データ分析等で大変お世話になりました。